令和4年4月28日

学校だより

5月号

横浜市立美しが丘東小学校 学校長 藤本 光子

ホームページ http://www.edu.city.yokohama.jp/es/utsukusigaokahigashi/

体験を増やす

校長 藤本 光子

「廊下や階段に土があまり残っていなかったんです。」

そう教えてくれたのは、いつも学校を清掃・点検している用務員の方々です。

先日、久しぶりに行われた避難訓練では、火災を想定し、実際の避難と同じように上履きの まま校庭に避難する練習をしました。ほとんどの子が静かに、落ち着いて行動できていました。

訓練後は上履きの土を払って教室に戻ったのですが、廊下や階段は予想以上に土だらけになり、これは掃除が大変だと思っていました。何人かの子どもが「大変なことになった。」とつぶやいているのも聞こえてきました。ですが、用務員が教えてくれた通り、実際には次の授業が始まる頃には、ほとんど土が残っていませんでした。それはなぜかというと、実は避難訓練直後に、6年生が掃除をしてくれたからなのです。

私は、まず、6年生に感謝すると同時に、頼もしさを感じました。この | 年間はいろいろなことを任せていきたい、そう思いました。

一方で、子どもたちが自然と掃除をしたわけではなく、担任が声をかけたのだと思いました。 なかなかうまい指導だな、と思っています。この指導は、子どもたちの主体性を育てるうえで、と ても重要になってきます。

高学年になると、「下級生のために役に立てるといいね。」「学校のために何かできるかな。」と問われることが増えます。しかし、それらの言葉は非常に抽象的です。実際に体験したことのないものについて考えるのはとても難しく、そこから何かを生み出すことは至難の業でアイディアもなかなか浮かびません。だから、教師は活躍のチャンスの場を見逃さず、むしろ意図的に作り出してでも、子どもに体験させていきます。一見、先生に言われたからやる、という行動は主体性が伴わないように感じられるかもしれませんが、この体験がなくては子どもたちの主体性は伸びていきません。これをきっかけに、みんなが使う場が汚れていたら掃除をすることはとても役に立つんだ、という考えが体験と結びつき、経験となるのです。この経験をもとに、下級生が廊下にこぼしてしまった給食をふいてあげる、破れた本を修理して返却するなど、自分なりに考えを広げていくことができます。高学年としてみんなのために行動する、ということは、リーダーとして目立つことだけではなく、陰ながら支えることでもあるのだと実感できます。

子どもは、まだ10年前後しか生きていません。私たちの想像以上に体験が少ないです。コロナ禍では体験できることが少ないと言われていますが、こんな何気ない生活の1ページを大切にして、体験を増やし、考える力や思いやる心を伸ばしていけるような学校でありたいです。